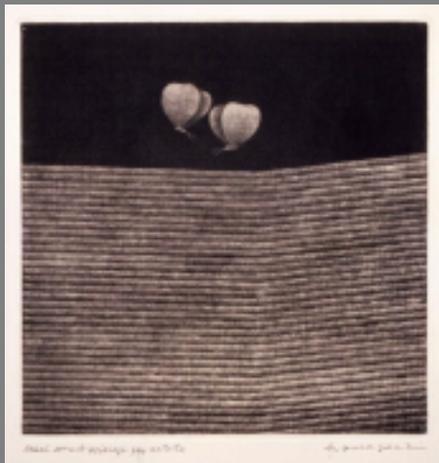


浜口陽三、ブルーノ・マトン展
 | ひとつ先の扉

 2022年
 1月15日〔土〕～4月3日〔日〕


1

Yozo HAMAGUCHI

Bruno MATHON



2

1. 浜口陽三 Yozo Hamaguchi 《2匹の蝶》1977年頃 メゾチント、紙 15.5×15.4cm

2. ブルーノ・マトン Bruno Mathon 《チェスクラブ「隠された音叉」より》1994年 アクアチント、紙 25.0×24.8cm

フランスで銅版画を発展させた浜口陽三と、日本の文化・芸術に親しんだ画家ブルーノ・マトン。
 ひそやかに、心と遊ぶための展覧会です。

心の片隅にある記憶を、呼び覚ますような作品の数々

彫ることで生まれる銅版画の奥行き

なぞなぞ・絵と言葉のかくれんぼ

— ふたりの詩人 大岡亜紀、谷川俊太郎のコトバの断片

開催趣旨

浜口陽三(1909～2000)は、フランスで新しい銅版画技術を開拓し、20世紀後半を代表する銅版画家として活躍しました。浜口の作品では器の一部だけが透き通っていたり、月のように果物が宙に浮いたり、柔らかな空間の中に永遠の時間が流れているかのようです。本展ではその浜口作品と共に、日本の芸術・文化に親しんだフランスの画家の一人、ブルーノ・マトン(1938～2020)の銅版画を紹介します。

ブルーノはパリの映画学校を卒業後、短編映画を手がけましたが、より直接的に表現を追い求める決意をして銅版画を学びます。その後、版画や油彩画、アクリル画などを発表しながら、美術評論を続け、短編小説も出版しました。90年代以降は日本を度々訪れ、「手に思考が宿る」日本の工芸に、西洋の芸術にはない可能性を見出しています。

彼は、銅版画のプロセス自体が芸術であると捉え、知的な表現を試みました。例えば「隠された音叉」シリーズでは、作家の問いかけやまなざしが、作品に柔らかに刷り込まれています。物静かで饒舌、繊細でユーモアのある作家の内面も一つの要素となり、銅版画と鑑賞者に対話が生まれます。

シンプルに見える線のシリーズは、イメージを超える新しい次元を求めて思索した時期の作品です。見る人の想像をくすぐり、心を象ります。展示にあたり、詩人の大岡亜紀氏、谷川俊太郎氏に、作品から浮かぶ言葉を書いていただきました。ご自身のイメージと合わせてご鑑賞ください。

銅版画には、油彩画や水墨画とは異なる表現の深さがあります。二人の作品はベクトルが違うものの、静かな引き潮のように、私たちの中にある感覚を遠くへと導き、星の光のように、その先の世界を照らします。浜口作品約20点、ブルーノ作品約50点の構成です。



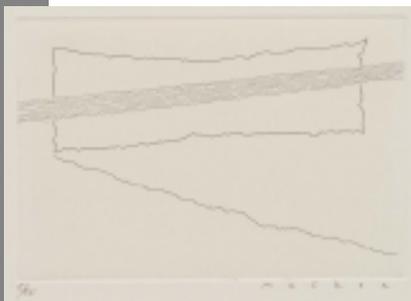
アトリエに日の光がめぐり、
夕暮れには窓を華やかに染めます。
星やガラスのきらめきと、
人の気配が感じられるシリーズを展示します。

3

風景を想起させるシリーズ。
何に見えるでしょう？
答えはひとつではありません。



4



5



6

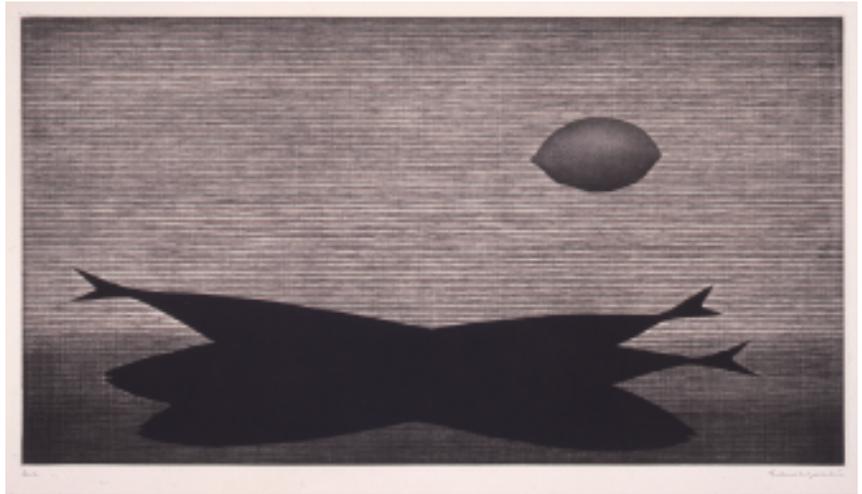
「イメージを超える次元」を模索していた時期の連作です。
下書きを一度ならず作成し、鉛筆やインクで濃淡や太さを
描き分けました。

シンプルに見える線は、作家が繰り返し描いてきた形か
ら、余計なものを削ぎ落として生まれました。余白を重ん
じる日本美術にも通じ、見る人の想像力をくすぐります。
本展では、この連作を通して、銅版画の魅力の1つ、絵と対
話するための空間を作ります。

3. ブルーノ・マトン Bruno Mathon 《熱上昇 「隠された音叉」より》1994年 アクアチント、紙 19.8×19.8cm
4. ブルーノ・マトン Bruno Mathon 《「Composition」より》2011年 エッチング+彩色、紙 10.5×16.6cm
5. ブルーノ・マトン Bruno Mathon 《無題》2004～2005年 エッチング、紙 9.5×14.4cm
6. ブルーノ・マトン Bruno Mathon 《無題》2004～2005年 エッチング、紙 9.7×14.3cm



7



8

7. 浜口陽三 Yozo Hamaguchi 《さくらんぼ（版画集6点組より）》1974年 カラーメゾチント、紙 5.5×5.5cm

8. 浜口陽三 Yozo Hamaguchi 《魚とレモン》1958年 メゾチント、紙 26.5×48.8cm

浜口陽三の銅版画

浜口陽三は、新しい技法を見つけたことによって、銅版画に新しい命を吹き込みました。それまでの絵に存在しなかった、柔らかで、優しい光のある世界が生まれました。

ブルーノ・マトンの銅版画

ブルーノ・マトンは、銅の板を彫り、インクを詰めて紙に転写する銅版画のプロセスはそれ自体が芸術である、と考えていました。作家のまなざしや作業の静かな時間は、紙の上に凝縮され客観的に残ります。ブルーノの銅版画は、見る人が絵と対話するための鏡のような性格があります。静かで、おしゃべり好きだった作家の、複雑でシンプルな、繊細で透明な作品をご鑑賞下さい。

●なぞなぞ・絵と言葉のかくれんぼ

— 詩人 大岡亜紀、谷川俊太郎

ブルーノの小さな線のシリーズに寄せて、二人の詩人、大岡亜紀氏と谷川俊太郎氏に、思い浮かんだコトバを書いていただきました。

作品を見て浮かんできた谷川氏のコトバの断片と、作品の方に寄り添い、鑑賞する皆さまへの問いかけのような気持ちで作った大岡氏のコトバとを、作品と同じ空間に展示します。

詩人達とご自身の心を比べたり、さらなるコトバを探したり、他の来館者のコトバを共有したりしながら、銅版画を介した心のふれあいをお楽しみください。

関連イベント

※詳細は決まり次第、当館ホームページにてお知らせします。

- ・「扉の中の絵とことば」 絵と言葉を綴じ込んで小さな本をつくります。講師：空想製本屋・本間あずさ（製本家） 3月上旬予定
- ・「銅版画体験教室」 講師：江本 創（造形作家） 1月と2月の予定
- ※会期限定のプチガトー 会期中、作品よりイメージしたプチガトーを提供します。

浜口陽三 Yozo Hamaguchi

1909年和歌山県生まれ。1927年東京美術学校彫塑科に入学。梅原龍三郎の助言もあり2年で中退し、1930年に渡仏。油彩や水彩、銅版画も手がける。1939年に第二次世界戦争のため帰国。1950年頃、国内で銅版画に本格的に取り組む。1953年、再渡仏。1955年頃、銅版画の新しい技法、カラーメゾチントを開拓。1957年にその技法を用いた作品で、東京国際版画ビエンナーレとサンパウロ・ビエンナーレにて大賞受賞。以降、多くの受賞歴を重ね、世界的に活躍した。1981年にサンフランシスコに移り制作を続ける。1988年以降、「浜口陽三回顧展」(サンパウロ美術館 [ブラジル]、アンティオキア美術館 [コロンビア]) 他、各地で回顧展。1996年に帰国し、2000年逝去。

ブルーノ・マトン Bruno Mathon

1938年北フランス生まれ。パリの映画学校を卒業後、ルイス・ブニュエルについての本を出版し、短編映画を制作。1965年フランス国立映画センター賞を受賞。1969年、映画から絵画や版画に専念することを決意。1970年から80年代、油彩画や銅版画の個展をスペイン、イタリア、フランスなどで開催。90年代以降は日本をたびたび訪れ、東京、名古屋、京都でも作品を発表。2000年には大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレに参加し、6人の詩人の詩と版画による詩画集「六つの徳の物語」を刊行。2001年、具象絵画の回顧展をパリで開催し、イメージを超える新しい次元を得るまで、作品の発表を中断。抽象的なドローイングによって個展を再開したのは8年後。2011年、友人でもある15代樂吉左衛門 監修の佐川美術館(滋賀県)に於ける「吉左衛門 X Au-delà 言語の彼方へ: Bruno Mathon ドローイング+樂吉左衛門フランスでの作陶/花入」展に参加。その他、フランス文化放送ジャン・デーヴの番組「Peinture fraîche」に1998年から番組終了の2010年まで参加。2011年、アートブログ「Le Pavillon turquoise」を開設し、不定期更新。2015年に小説『Et puis, et puis encore』を出版。2019年、日本の版画について解説文(サルセル国際版画ビエンナーレ図録)、2021年、追悼展示(サルセル国際版画ビエンナーレ、フランス)。

基本情報

浜口陽三、ブルーノ・マトン展 一ひとつ先の扉

- 会期 : 2022年1月15日(土)～4月3日(日)
- 会場 : ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション
- 休館 : 月曜日(3月21日は開館)、3月22日(火)
- 開館時間 : 11:00 - 17:00 (土日祝 10:00 - / 最終入館 16:30)
- 入館料 : 大人 600円、大学生・高校生 400円、中学生以下無料
- 住所 : 〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町 1-35-7
- アクセス : 東京メトロ半蔵門線 [水天宮前] 3番出口そば
東京メトロ日比谷線 [人形町] A2 出口徒歩 8分
首都高速箱崎 I C [浜町出口] または [清洲橋出口] T-CAT 駐車場前

主催: ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション

後援: 在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ日本

